令和4年度
(2022 年度)

学校関係者評価報告書

令和4年（2022年） 4月1日から
令和5年（2023年） 3月31日まで

令和5年（2023年）8月30日

学校法人吉田学園
専門学校北海道ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ大学校

■令和4年度　学校関係者評価について
〈説明〉
　　学校関係者評価委員会では「自己点検・評価」の結果について、学校関係者評価委員の皆様に適正な評価をいただき、そのご意見・助言をもとに改善を図り学校の適正運営にあたるものです。特に学校基本情報公表及び自己点検・評価の結果報告を行ない、第三者の視点でその評価が適正であるかを審議いただくとともに、適切なご意見や助言を伺い教育課程・シラバスに反映する。

1. 実施日時
　令和４年８月 30 日（金）　19:10～20:10

2. 実施場所
　専門学校北海道リハビリテーション大学校　8階演習室
　　※なお、外部評価委員の方はオンラインによる会議参加

3. 実施方法
（1）実施組織：学校関係者評価委員会
　〇外部評価委員：
　　伊藤　　隆　　医療法人渓仁会札幌西円山病院　リハビリテーション部　部長
　　〈企業関係者〉
　　源間　隆雄　　医療法人札幌麻生脳神経外科病院　リハビリテーション科　科長
　　〈企業関係者〉
　　岸上　博俊　　日本医療大学リハビリテーション学科　作業療法学専攻　教授
　　〈教育に関する有識者〉
　　佐々木智教　　社会福祉法人北翔会　医療福祉センター札幌あゆみの園
　　地域支援部　地域支援課　課長
　　〈卒業生〉
　（欠席）
　　鵜飼　　渉　　札幌医科大学医学部　神経精神医学講座　准教授
　　〈保護者〉

　〇学校関係者：
　　柿崎　貴浩　　専門学校北海道リハビリテーション大学校　副校長

（2）評価基準：文部科学省「専修学校における学校評価ガイドライン」に準拠しています。
（3）評価方法：令和2年度　学校運営・教育活動実績報告書に対する学校関係者評価。

4. 評価項目
　次の11項目について実施
（1）教育理念・目標
（2）学校運営
（3）教育活動
（4）学修成果
（5）学生支援
（6）教育環境
（7）学生の受け入れ募集

(8)財務
(9)法令等の遵守
(10)社会貢献・地域貢献
(11)国際交流

5. 評価項目に対する評価
(1)4段階で点数評価しました。
　4:適切　3:ほぼ適切　2:やや不適切　1:不適切
(2)委員会で提出された意見や質疑、提案事項を記載

① 項目３　教育活動（３）－２　「教育理念、育成する人材像や業界のニーズを踏まえた学科の修業年限に対応した教育到達レベルや学習時間の確保は明確にされているか」

≪委員からの質問・意見等≫

・国試対策のグループワークのやり方について、感染対策のこともあり集まってグループで実施しているのか、オンライン上でのグループ学習なのかそのあたりの実施方法についてお聞きしたい。
・オンラインの場合に、そこに参加しない学生がいた場合にどのような対応を取るのか。
・ST 学科の既卒生は個人学習になりすいように思う。今後はモチベーションの維持やフォロー体制などが難しくなるタイミングであると感じる。

≪学校からの回答≫

・コロナのことがあるので、密を避けるために Google meet に集まり画面越しのやり取りや、時期によっては感染が緩やかな時は対面でアクリル板を置き、ホワイトボードを見ながら、いわゆるピアティーチングなど並行して実施している。
・教員が介入し参加するように促している。継続的に参加しない学生はいない。
・ST 学科については、卒業クラスの担任とは別の教員が 6 名担当している。模試を送り回答を送り返してもらい採点するなど、やり取り自体はかなり進んでいる。今後は学校に登校してもらい、指導する予定でいる。既卒生も登校しての学習を望んでおり、引き続き国試指導にあたる。自宅浪人の場合はうまく指導が行き届かない場合もあり、基本的な生活リズムを維持しながら規則正しい生活の中で、学習時間の確保をすることが非常に重要と考えている。

② 項目４　学修成果（４）－３　「退学率の低減が図られているか」

≪委員からの質問・意見等≫

・退学率低下の理由について知りたい。
・病院では退職者の次の就職先が異業種であることが分かった。理由は不明だが増え始めている。先輩とのコミュニティーが欠けているため、コミュニケーションをとる機会を設けるなど、そのような環境を作ることも必要と感じている。
・大学 3 年生はどの学科をみても退学者、留年者が圧倒的に多くなっている。職種の問題ではなく、入学式などのセレモニー等、切れ目なく始業したことの影響は少なからずあるように思う。
・最近の学生から感じることは、目の前の苦しい状況から逃れたい、逃れるための理由を他人のせいにする傾向がある。面談等で志望理由を確認すると、「親が行けと言った」という自らの選択ではないという、逃げ道を作っていると感じる発言が目立っている。

≪学校からの回答≫

・コロナが理由での退学は意外と少ないと感じている。しかし、学校に来られない期間があり、先輩との交流ができないために先輩からの情報がもらえないのも１つの要因ではないかと考えられる。学力低下だけの理由ではないと思われる。

・リハビリ職に対する将来の希望が持てない学生がいることは残念に思う。

・入学、卒業などの節目のセレモニーは大事な行事と考える。職種が関係何のであれば、共通点はこの部分にあるのかもしれない。

・退学の理由としては増えているように思う。オープンキャンパスでは来場した保護者には、学生が勉強が大変だと感じ、逃げたい気持ちになった際には、話をすり替え、親のせいにするケースがあるため、本人の意思で職業選択を行っているのかを十分に確認いただくようお伝えしている。

６．その他

（１）以下、令和３年度（2021 年度）　学校自己点検・評価を併せてご覧ください。

項目１　　教育理念・目標

■自己点検・評価結果　４．０（適切）

■コメント　：特に課題はない

項目２　学校運営

■自己点検・評価結果　３．９（ほぼ適切）

■コメント　：（２）－８について

「システム上の問題点については改善が図られているが、効果的な運用に関してはまだ課題もある。現在、校務システム、教務システム（LMS）のリプレースが検討されており、一層の業務効率化が実現できるよう、学校現場の実態や意見等を積極的に管理部門へ伝えていく。」

項目３　教育活動

■自己点検・評価結果　４．０（適切）

■コメント　：特に課題はなかった

項目４　学修成果

■自己点検・評価結果　３．６（ほぼ適切）

■コメント：（４）－２について

理学療法学科では、模擬試験における低得点者への個別指導を重点的に取り組むとともに、グループ学習を積極的に活用し、学生同士が互いに協力しながら学び合うピアティーチングに取り組むことで、難関試験へ果敢に挑戦する強い意識の醸成と、切磋琢磨しつつも個々が自信を持てるコミュニティーづくりを進める。

作業療法学科では、国試対策の学習においてグループ学習を効果的に機能させ学び合いを進めること、夏期休業期間を有効に活用すること、模試における低得点者の弱点等を把握し早期から対応することが重要と考えている。特に、低得点者の中には、注意力不足によるミスの多発や文章読解力・基礎知識の低さのためつまずいている者もおり、個々の課題に応じた対策を講じていく。

言語聴覚学科では、非常勤講師による授業内容の定着度の把握（続けて国試対策への落とし込み）、グループワーク学習による過去問対策の実施、模試結果の検証と対策の修正、夏季及び冬季休業期間の効果的な活用に取り組むほか、前年度不合格であった学生

に対しては自己学習（模擬試験含む）の促しと定期的な働きかけを行うなど、学科教員全体の連携・協働体制の再構築も含め抜本的な見直しを行っていく。とりわけ、当学科では受験者数が少ないため１名の合否が合格率に大きく反映され、合格率の成否は学科の存在意義に関わることから、教員が一丸となって取組を充実させていく。

（４）－３について

各学科とも、離脱者に関する分析を丁寧に行い、対策の検証・見直しを行う。
また、個別面談を通じて早期に学生の問題を把握し、関わり合いを増やす中でタイムリーな助言・支援を行うとともに、学生のモチベーション向上を図る授業づくりや教授法等、更なる工夫・改善を重ねて退学者抑止に努める。

項目５　学生支援
■自己点検・評価結果　４．０（適切）
■コメント：特に課題はなかった

項目６　教育環境
■自己点検・評価結果　４．０（適切）
■コメント：特に課題はなかった

項目７　学生の受入れ募集
■自己点検･評価結果　４．０（適切）
■コメント　:特に課題はなかった

項目8　財務
■自己点検･評価結果　４．０（適切）
■コメント　：　特に課題はなかった

項目9　法令等の遵守
■自己点検･評価結果　４．０（適切）
■コメント　:特に課題はなかった

項目10　社会貢献･地域貢献
■自己点検･評価結果　４．０（適切）
■コメント　：　特に課題はなかった

項目11　国際交流
■自己点検･評価結果　―
■コメント　:＊現在、留学生の受入れ実績なし

（２）新たな教職員の臨床研修制度創設に向けた準備状況について

以前行っていた教職員の臨床研修については、様々な事情からこれまでの制度の運用は休止となっている。教職員へのアンケート調査では、臨床での経験を教育に反映することができ、報酬の発生にかかわらず、是非、臨床研修による研鑽を積みたいという声が非常に多かった。その後再開は出来ていないが、学園の研修規程内の範囲で実施できるよう、実施要項を再整備し、新たな制度として始動できるよう準備を進めている。

≪委員からの質問・意見等≫
特になし。

（3）教員の業務に関する意識調査について

教員の業務量や働き方について、アンケート調査を実施たため、結果について報告させていただいた。業務改善に関する各委員の方からのご意見を頂戴した。

≪調査結果概要≫
・勤務時間内に休憩は取れているか→とれていない 50%
・退勤時刻→19 時までに退勤 80%
・勤務後に自宅で仕事をする時間→1 時間未満 55%
・時間外勤務の振替できているか→できていない 61%
・自分の業務が忙しいと感じているか→感じている/どちらかというと感じている 77%
・どの時期に忙しいと感じているか→4 月/12 月/2 月
・業務改善を図るために検討を行う機会があるか→ない 16.7%　苦しい状況にならないように考える必要あり。
以上の結果を踏まえ、事務量が多いとの意見があり、業務の中で無駄を省き実施可能のものから実践するための検討を行っていきたいと考えている。

≪委員からの質問・意見等≫
・男性の育児休暇、有給休暇の取得率はどうなっているか。
・独身、家庭持ち、学外での業務（道士会など）を行っているかなど、様々な環境の違いもあるのではないか。
・現在の職場では、業務の断捨離を大胆に行った。必要のない業務は切り捨て、業務の見える化であらゆる面で指導しやすくなった。
・職員全員からアンケートを取り、やめてもよい業務をピックアップする。例えば福利厚生の集金業務や経理関係についてはやめても影響はなかった。また休日対応については課長職が 1 人必ず出勤し、電話対応などにあたることにしている。

≪学校からの回答≫
・男性教員で育児のための特別有給休暇を取った職員はいる。育児のための有給休暇の取得率までは把握できていない。
・道士会の役員業務や本校が会場となる研修での出勤に対する業務保証については、現在未整備であり、今後検討の必要がある。
・業務の大胆な断捨離方法については、今後ご指導願いたい。
・様々なご意見をいただきました。働き方改革の理想は理解できるが現実的な取り組みとしては、なかなか難しいと感じている。委員の方々のご意見は大変参考になる。今後もお知恵を拝借できればと考えている。

以上